

IODEP マニュアル
《汎用 TCP サーバー》
rev 1.0

2013/04/18 株式会社 Javatel

目次

IODEP マニュアル 《汎用 TCP サーバー》 rev 1.0	1
目次.....	2
1 この文書について.....	3
2 変更履歴.....	4
3 設定ファイルの準備.....	5
4 電文フォーマットの定義.....	6
4.1 サーバの電文フォーマット定義ファイルを作成する.....	6
5 TCP デバイス→IODEP	7
5.1 定義ファイル名.....	7
5.2 メッセージ詳細.....	7
5.2.1 定義行の構成.....	7
5.2.2 TCP サーバ機能に対する受信シグナル書式.....	7

1 この文書について

本文書では、IODEP が汎用 TCP サーバーとしてメッセージを待ち受ける機能について記述します。「IODEP_共通.doc」を先に読んでいることを前提とします。

2 変更履歴

1.0 2013/04/18 マニュアルの文書構成を大幅に見直し。複数ファイルに分割。

3 設定ファイルの準備

インストールフォルダ C:\¥Javatel¥IODEP にある、**iodep.ini** ファイルをテキストエディタで編集してください。空行および、行頭が「#」で始まる行は無視されます。

IODEP.configurableTcpServer. (フォーマット名) .ListenPort	「(フォーマット名) .sdx」ファイルにより定義された TCP サーバの待ち受けポート番号。Windows ファイアウォールで受信許可されている必要があります。
IODEP.configurableTcpServer. (フォーマット名) .AcceptClient.1	TCP サーバのセッション受け入れ IP アドレス
IODEP.configurableTcpServer. (フォーマット名) .AcceptClient.n (n は自然数)	同上。ライセンスで許可された数だけ設定できます。

4 電文フォーマットの定義

連携相手のデバイスが発信する電文フォーマットに対して、iodep の TCP サーバー機能を合わせるためにフォーマット定義ファイルを作成する必要があります。

4.1 サーバの電文フォーマット定義ファイルを作成する

設定ファイル iodep.ini の「IODEP. signalDefFileDir」で指定されたディレクトリ直下に、設定ファイル中で「フォーマット名」として決めた名前+拡張子「sdx」の XML ファイルを作成します。

SDX ファイルの内容は以下の通りとなります。例としてファイル名は「sample.sdx」とします。

```
<?xml version="1.0" encoding="UTF-8" ?>
<signaldef name="電文フォーマット定義サンプル">
  <beginning>[</beginning>  <!--電文の開始文字列 -->
  <ending>]</ending>  <!-- 電文の終端文字列 --->
  <delimiter>#</delimiter>  <!-- 電文の記号と引数をわける区切り文字列 -->
  <signals>
    <!-- 発生コード"A"の引数種別と、ConfigMaker アプリケーションで表示する名前-->
    <!-- 引数の種別は「number」または「ascii」です。
    <def signal="A" argtype="number">出来事 1</def>
    <def signal="B" argtype="number">出来事 2</def>
    <def signal="C" argtype="ascii">出来事 3</def>
  </signals>
</signaldef>
```

上記のような設定ファイルを置くことにより、TCP サーバは例えば

[A#100]

のような文字列を受信したときに

発生コード=A

引数=100

のシグナルとして解釈するようになります。

また、このファイルを設置することにより、ConfigMaker アプリケーションで「電文フォーマット定義サンプル」という名前のシグナル受信デバイスが選択できるようになります。

5 TCP デバイス→IODEP

IODEP は TCP サーバーで受信したシグナルを、コマンド定義ファイルの記述に従ってメッセージとして扱います。コマンド定義ファイルは `ConfigMaker.exe` で編集することができます。

5.1 定義ファイル名

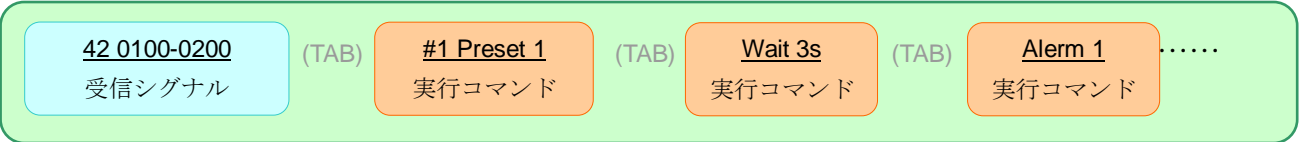
コマンド定義ファイルのファイル名は、以下のように決められています。

- ・ フォーマット名が「xxxx」の場合、受信したシグナルによって Omnicast へコマンド実行する定義
→xxxx-omnicast.dbx
- ・ フォーマット名が「yyyy」の場合、受信したシグナルによって Selco マルチプレクサへコマンド実行する定義
→yyyy-selco.dbx
- ・ フォーマット名が「sample」の場合、受信したシグナルによって Moxa E2000 シリーズへコマンド実行する定義
→sample-moxa.dbx
- ・ フォーマット名が「sample2」の場合、受信したシグナルによって PELCO マトリクススイッチャへコマンド実行する定義
→sample2-pelco.dbx

5.2 メッセージ詳細

5.2.1 定義行の構成

コマンド定義ファイルでは、各行に、**受信シグナル**に続いて任意の個数の**実行コマンド**を記述します。実行コマンドについては「IODEP_共通.doc」の 4.1.2 章、5.2 章および操作対象のデバイスに関する文書を参照して下さい。



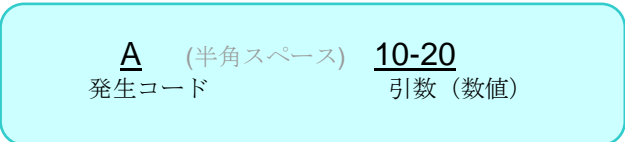
受信シグナル	実行コマンド (TAB 区切りで複数記述可能)		
定義ファイルの種別に応じた受信シグナル	定義ファイルの種別に応じた実行コマンド	定義ファイルの種別に応じた実行コマンド	定義ファイルの種別に応じた実行コマンド

サービスがファイル中で定義されている受信シグナルを受け取った際、それに続く実行コマンドが独立したスレッドで続けて実行されます。

同じファイル中で同一の受信シグナルについてのコマンドを複数定義することもでき、その場合各行で定義されたコマンドは別スレッドで並列に実行されます。

5.2.2 TCP サーバ機能に対する受信シグナル書式

独自に定義した TCP サーバ機能の定義ファイルでは、発生コードと引数を半角スペースでつなげて受信シグナルを定義します。TCP サーバ機能についての詳細は 11 節を参照してください。



2013 Javatel

① 発生コード(ASCII) :

SDX 定義ファイルで定義されている発生コード

② 引数(10 進表記または ASCII 文字列) :

SDX 定義ファイルで定義されている型に従った引数を記述する。数値型の場合は「-」(ハイフン) で二つの番号をつなぐと範囲を表現できる。